

# 「紫式部日記」における容姿描写 — 「源氏物語」と比較して —

池田 節子\*

Depiction of Visual Appearance in *The Diary of MurasakiShikibu* in Comparison with *The Tale of Genji*

Setsuko IKEDA\*

## Abstract

While the appearances of each of the twenty female court attendants in *The Diary of MurasakiShikibu* are given equivalent descriptions, it is still difficult to create a distinct mental picture of any of these characters. This is largely due to the fact that MurasakiShikibu's contemporaries were accustomed to cover their faces with a fan; therefore, in the absence of direct visual reference to facial features such as eyes, nose, and mouth, the portrayal of the characters tends to be extremely homologous, using a limited selection of adjectives. Words that rarely appear elsewhere in literature, such as "sobiyaka" and "komaka," are repeatedly used for various characters in both *The Diary of MurasakiShikibu* and *The Tale of Genji*, making it even more difficult to deduce or pinpoint the exact meaning of these words in each context. Furthermore, as the expressions in *The Diary of MurasakiShikibu* are constrained by the depiction of actual women, its imagery never achieves the same vividness as that of *The Tale of Genji*.

## 一 はじめに

紫式部は、藤原彰子の初めての出産に続く盛大な祝いの儀式における女房たちの姿を詳細に描く。裳・唐衣・表着・桂について、生地 of 質感・色の配色・細工の趣向などを、誰それはかくかくしかじか、あの人 of 衣裳の生地は舶来品などと、女房名をあげて記す。次に同じような儀式が行われるときの参考にするという目的もあるだろう。しかし、白い衣裳は美醜をはつきりさせるものだからか、女は着飾ると皆美しく見えるが、額つきに品の良し悪しが表れるなどと記し、女房たちの容姿を具体的に批評するのは、衣裳とそれを着用する女たちへの並々ならぬ好奇心を示しているよう。

衣裳には才覚と経済力が表れるが、顔・髪・スタイル・肌のつやなどは、もっと直接的に女の人生を物語るものであろう。寛弘六年の正月の記事から脱線して女房たちの容姿を詳しく記す箇所もある。「紫式部日記」における容姿描写に注目し、「源氏物語」の容姿描写との相違について考えたい。

## 二 女房の容姿描写一覧表

「紫式部日記」において容姿が具体的に描かれるのは、彰子と女房たちである。男性の容姿は、藤原道長が簡略ながらある。「源氏物語」では、赤子の容姿がかなり具体的に描かれるが（密通の結果誕生したためでもある）、「紫式部日記」では誕生した敦成親王・敦良親王の容姿に言及することはない。おそれ多いからであろうか。

さて、「紫式部日記」では、二〇人ほどの女房の容姿が説明されてい

る。紫式部の熱意は感じられるのだが、何回読んでも、どういう女性をイメージしたらよいのか、はつきりしない。「源氏物語」のほうが、多くの語が費やされているわけでもないのに女君のイメージがわかかぬてからの疑問を解消するための一助として、一覧表を作成してみた。参考までに、彰子と倫子の容姿描写も含めた。なお、彰子の女房で最上席は宣旨の君、次は大納言の君、以下宰相の君・小少将の君・宮の内侍・紫式部の順とのことである。<sup>1)</sup>

・まとめて記されている場合は、二項目以降は「( )」とする。

例 「すがたつき、もてなし、いささかはづれて見ゆるかたはらめ、はなやかにきよげなり」の場合(41)、「もてなし」かたはらめの項では、「(はなやかにきよげ)」とする。

・人物は登場順に並んでいるが、複数回登場する人物はまとめてある。

容姿一覽

人物名	顔	髪	スタイル	頭つき	額つき	目	口つき	肌	傍ら目	手つきかひなつき	もてなし	全体
宰相の君 (16)	うち赤みたまへるなど、こまかにをかしう				いとらうたげになまめかし							絵にかきたる物の姫君の心地／よき人
宰相の君 (44)	面うち赤みてあたまへる顔、こまかにをかしげなり											
宰相の君 (75)	いとこまかに、にほひをかしげなり	つねよりつくろひまして	らうらうしくをかし。丈だちよきほどに、ふくらかなる人								(らうらうしくをかし)	いとをかしげに
宮の内侍 (30)		元結ばえしたる髪の下がり端、常よりもあらまほしきさまして	いとものもいしく、あざやかなる様体に						いときよげに			
宮の内侍 (77)	いとものきよげにそびそびしく、なか高き顔して	髪ざし：あなもののきよげと見えて、はなやかに愛敬づきたる	丈だちいとよきほどなるが、あたるさま、姿ものものしく、今めいたる様体に	(あなものきよげと見えて、はなやかに愛敬づきたる)	(あなものきよげと見えて、はなやかに愛敬づきたる)			色のあはひ、白さなど、人にすぐれたり			ただありにもてなして	いときよげなる人／こまかにとりたててをかしげにも見えぬ
彰子 (35)	面やせて：常よりもあえかに、若くうつくしげなり	こちたき御ぐしは、結ひてまさらせたまふわざなりけり						いとどしき御色あひの、そこひも知らずきよなるに				うるはしき御気色にも見えさせたまはず
左衛門の内侍 (41)			はなやかにきよげなり						(はなやかにきよげなり)			
弁の内侍 (41)			いとささやかに									をかしげなる人



人物名	宰相の君 (北野の三位) (76)	式部のおもと (78)	小大輔 (79)	源式部 (79)	小兵衛・少武 (79)	宮木の侍従 (79)
顔	かどかどし きかたちし たる人／見 もてゆくに こよなくう ちまさり、 らうらうし くて	いとこまか によくはべ る／うち笑 みたる、愛 敬もおほか り	かどかどし う／かたち はなほすべ きところな し	顔こまやか に、見るま まにいとを かしく、ら うたげなる けはひ、も のきよくか はらかに		いとこまか にをかしげ なりし人／ 顔もいとよ かりき
髪		いみじくう るはしくて、 長くはあら ざるべし。 つくろひた るわざして	うるはしく、 もとはいと こちたくて、 丈に一尺余 あまりたり けるを、お ち細りては べり			桂に少しあ まりて、未 をいとほ やかにそぎ て
スタイル	ふくらかに、 いと様体こ まめかしく (いまめか しうか?)	いとふくら けさ過ぎて 肥えたる人 ／ふとりた る様体の、 いとをかし げ	ささやかな る人の、様 体いと今め かしきさま して	丈よきほど にそびやか なるほどに て		いと小さく 細く、なほ 童女にてあ らせまほし きさま
頭つき						
額つき		まことにき よげ				
目		まみ…(ま ことにきよ げ)				
口つき	はづかしげ さも、／に ほひやかな ることも添 ひたり					
肌		色いと白く にほひて				
傍ら目						
手つきかひ なつき						
もてなし	いとびし く、はなや かにぞ見え たまへる					
全体			あなをかし の人やとぞ 見えてはべ る	人のむすめ とおほゆる さましたり	いときよげ	「心と老い つき」出家 してしまっ た



### 三 顔と目・鼻・口

しばしば言及されるのは、顔・髪・スタイル・額つき・肌の色である。顔全体の印象は記されているが、目・鼻・口についてはほとんど言及がない。宮の内侍が「なか高き顔」とあるのは鼻が高かったのである。女房たちの容姿がつかめなかった理由の一つは、現代人にとっては大変な部分の目・鼻・口への言及が少ないことであろう。扇で顔を隠すことが多いので、それらは他人の目につきにくかったのである。ろろが「顔」とは出てくるので、紫式部が同僚女房の目・鼻・口を見ていないわけではない。頭のかたちや横顔、手つき腕つきへの言及も少ない。扇を持つ手についての言及が少ない（五節の弁のみ）のは意外である。

宰相の君は三回描かれているが、三回ともほとんど同じ表現である。顔の色つやのよい人のようだ。「かどかどし」と賢そうな顔をしているのが、宰相の君（北野の三位。宰相の君は二人いる）と小大輔「かどかどし」い雰囲気なのが中務の乳母、「ものものし」いのが宮の内侍と中務の乳母である。小大輔は、「かたちはなほすべきところなし」ともあり、知性的な美人といえよう。五節の弁は「顔はここはやと見ゆるところなく」とはあるものの、「額いたうはれたる」とあるので美人とはいえない。「源氏物語」で額がはれているのは空蟬と末摘花である。額を除いた部分が顔なのであろうか。一覽表の女房たちの中で一番美人は宰相の君、その次は小大輔（髪が少なくなつたとはあるが）と源式部、チャーミングなのが式部のおもといつたところであろう。

さて、「源氏物語」では、目・鼻・口はどのように描かれているであ

らうか。目は、「まみ」三二例、「まなこゝろ」二例で、「まなこゝろ」は二例とも赤子の薫である。「まみ」三二例の内訳は以下の通りである。

・赤子または幼児八例、その内薫四例

・女性一五例―病氣・昼寝の寝起き・けんか・泣くなどの特別な場合

#### 七例

―特別な場合ではない例では、浮舟四例、軒端の萩・玉鬘・六の君・小宰相の君各一例

・成人男性四例、その内源氏二例

・老女三例

・若い男性二例

「源氏物語」を代表するヒロインで長期間登場する紫の上の「まみ」が言及されるのは、「涙ぐみたまへるまみのいとらうたげに」（若菜上四85）とある一例のみである。薫四例はすべて柏木と似ていることを指摘する場面で用いられている（「まなこゝろ」も）。浮舟も、大君と似ているとするものが三例、中の君と似ているとするものが一例である。桐壺更衣が源氏と似ていたと桐壺帝が藤壺に語る場面でも、「まみ」への言及がある。似ていることが問題にされる場合の用例が合計九例にもなる。すなわち、目はあまり描かれなれないにもかかわらず、似ているかどうかが問題になるとときには真つ先に言及される。

「口つき」は、容貌に用いられたものが八例ある。赤子または幼児が四例、老人が三例で、女君では軒端の萩だけである。鼻は、容貌の意は一〇例で、末摘花関連が五例、身分の低い男が一例、空蟬が一例である。空蟬も末摘花も美しくないという描写である。残りの三例は、

次のような、顔を代表するものとしての用例である。

わが身にては、まだいとあれがほどにはあらず、目も鼻もなほしとおぼゆるは心のなしにやあらむ。(総角五 280~281)

大君が、老女房たちを見て我が身を振り返る場面である。「目鼻立ち」という言葉があるように、目と鼻は顔を代表するものと見なされているが、それは、「源氏物語」の登場人物にとっても同じようだ。しかし、鼻は特殊な場合にしか描かれない。

「額つき」は九例ある。末摘花と浮舟が各二例、軒端の萩、夕顔の女房たち、子ども時代の紫の上、若い男、大君が各一例である。近江の君（頭中将の外腹の娘）について「額のいと近やかなる」（常夏 三243）とあり、彼女の品性の欠除を示す二大要素の一つ（もう一つは早口）である。

「源氏物語」では、顔の部位については、成人女性（老女は除く）の場合は、美しくない人を描くとき、あるいは誰かと似ているというときに取り上げられるようだ。但し、藤壺と紫の上の場合は、どこが似ていると具体的に描かれることはない。

#### 四 スタイルをめぐる言説―「そびやか」とはどういうことか

身長については、「よきほど」とされるのが、宰相の君、宮の内侍、源式部、「ささやか」は、弁の内侍、大納言の君、宣旨の君、小大輔である。小大輔については、「ささやかなる人の、様体いと今めかしきさ

まして」とあるが、「丈だちいとよきほど」「ものものし」とある宮の内侍、「ふくらか」とある宰相の君（北野の三位、但し「こまめかし」）についても「今めかし」い「様体」とある。これでは、「今めかし」（当世風だ。現代的だ）いスタイルとはどのようなスタイルのことをいうものか、全く不明である。言及される女房たちに背が高い人はいない。「源氏物語」では、空蟬の女房と軒端の萩が、背が高いとからかわれており、背が高いことは美ではない。

さて、横幅に関しては、「ふくらか」とされる宰相の君、もう一人の宰相の君（北野の三位）、「ものものし」とされる宮の内侍が太め、式部のおもとは「ふくらけさ過ぎて肥えたる」とあるので肥満といえよう。一方、宰相の中將の童女と源式部は「そびやか」、宣旨の君は「そびえて」とあり、「すらりとして」などと現代語訳されている。宣旨の君は「ささやけ人の、いとほそやかにそびえて」とあるので、「そびえて」は大柄なことをいうものではなく、また、「ほそやか」ともあるので、ただ細いことをいうのでもない。

大納言の君は次のように描かれている。

大納言の君は、いとささやかに、小さしといふべきかたなる人の、白うつくしげにつぶつと肥えたるが、うはべはいとそびやかに、髪、丈に三寸ばかりあまりたるすそつき、(75)

「ささやか」で「小さ」いが、「肥え」ていて、「うはべはいとそびやか」とはどのようなスタイルなのであろうか。太っていても「ささやか」

「小さし」なのだ。「ささやか」は小柄なことを、「小さし」は背の低いことをいうものであろうか。小柄で背は低く、かわいらしく太っているが、見かけはすらりとしているとは意味不明で、「そびやか」の解釈に問題がありそうだ。ともあれ、「ささやか」が痩せていることをいうものではなく、また、「そびやか」が背の高いことをいうものではないことを確認しておきたい。

「そび」を重ねた「そびそびし」が、顔についてであるが、宮の内侍に対して「いとものきよげにそびそびしく」、中務の乳母に「こまかに、そびそびしくはあらぬかたち」とある。それぞれ「ものきよげ」「こまか」というプラス評価の語とともに用いられており、「そびそびし」はマイナス評価の語ではなさそうだ。中務の乳母は、「こまか」で『紫式部日記全注釈』は、「上品でキリツとしているというほどでもない容貌で」と現代語訳する。『新潮日本古典集成』『新日本古典文学大系』『新編日本古典文学全集』は「かたち」をスタイルと解釈するが、「かたち」は通常は容貌をいう語である。「そびそびし」の「キリツとしている」という現代語訳は上手だと思うが、「こまかに」を「上品で」と訳するのは、中の君と浮舟が対比的に描かれている（浮舟六<sup>122</sup>）場面では、浮舟の方に「こまか」とあるので相応しくない（詳しくは後述する）。中務の乳母については、「ものの心えて、かどかどしくははべる人なれ」<sup>(106)</sup>、「ただゆるるかに、ものものしきさまうちして、さるかたに人教へつべく、かどかどしきはひぞしたる」<sup>(108)</sup>とある。二回連続して「かどかどし」と形容されており、「そびそびし」くない容貌だけ

れども才気のある人物だと描写されていることになる。このことから「そびそびし」が才気のある様子を表現することが推測されよう。

さて、「源氏物語」を参照して、「そびやか」「そびえて」が「キリツとしている」という解釈でよいのか確認したい。「源氏物語」では、「そびやか」が四例で、惟光の娘の藤典侍、玉鬘、薫（幼尼）、玉鬘の娘の中の君、中の君に各一例である。「そびえて」「そびやぎ」が各一例、いずれも明石の君である。「そびそびし」は用例がない。幼児の薫にも用いているので、「背が高い」の意ではなさそうだ。また、いずれも、かなりの褒め言葉とともに用いられている。「そびやか」と形容される女君は、自分の階級よりも上位の男君と結婚し、子どもを産んでいるという指摘もある<sup>(2)</sup>。女房たちとも共通する知的でたくましい女性たちといえようか。「すらりとしている」というより、「キリツとしている」という解釈がよさそうだ。

『紫式部日記』は、「そびやか」などの用例が合計六例で「源氏物語」と同数であるから、「紫式部日記」の使用率が高いことになる。なお、『古典対照語い表』によると、「そびやか」「そびゆ」「そびやく」は、「源氏物語」と「紫式部日記」以外では用例がない。「そびそびし」については記載がない。「そびやか」などは、かなりの褒め言葉にもかかわらず、最上層の女君にはあまり用いられていない。そのことは、「そびやか」などが、他からそびえている感じ、ある種の強さをいう語であること示唆するものであろうか。用例が少なく、語義が明らかにならないのが残念である。

## 五 容姿を形容する語

「紫式部日記」の容姿描写が理解しにくい理由として、同じ形容語がしばしば使用されており、女房たちの違いが明確にならないことが挙げられよう。そこで、用いられている形容語の用例数を調べた。以下は、ほぼ用例の多い順に並べてあり、かつこ内は用例数である。また、類義語と思われるものは同じ行に記した(最終行を除く)。

- をかしげ(9) をかし(6) びびし(1)
- こまか(9、内一例否定) こまやか(1)
- よし(7)
- きよげ(5) ものきよげ(1) きよら(2) ものきよし(1)
- 白し(4) 色のあはひ(1) 色あひ(1)
- ささやか(3) ささやけし(1) 小さし(2) 細し(1) 細やか(1) あえか(1)
- かどかどし(3) ものものし(3)
- そびやか(3) そびそびし(2、内一例否定) そびゆ(1)
- こちたし(3) 長し(2、内一例否定) 多し(1)
- あて(3)
- はなやか(3)
- らうたげ(3)
- らうらうじ(3)
- ふくらか(2) ふくらけし(1) 肥えたり(2) ふとりたり(1)
- つぶつぶ(1)

うつくしげ(2) うつくし(1)

愛敬(2)

うるはし(2、内一例否定)

なまめかし(2)

あらまほし(1) いとどし(1) 心にくし(1) すぐれたり(1)

似るものなし(1) まほ(1、否定) めでたし(1)

今めかし(1) 今めきたり(1) こまめかし(1) (今めかし)の

誤写か)

にほひ(1) にほひやか(1) にほふ(1)

心恥づかしげ(1) 恥づかしげ(1)

ここし(1) 若し(1)

あざやか(1) かはらか(1) なか高し(1) なよびか(1) は

れたり(1) ゆるらか(1)

これらの語のいくつかについて、「源氏物語」における用例を考察したい。

容姿の形容に用いられた「こまか」「こまやか」は「紫式部日記」に合計九例ある(容姿以外の用例が四例あり、合計で一三例)。「源氏物語」では、「こまか」七九例のうち、容姿に用いられたのは六例のみで、うち三例は浮舟である(残りは、赤子の薫一例、否定で弘徽殿女御(頭中将の娘)と鬚黒のものと北の方各一例)。中の君と浮舟を比較して、中の君は「心恥づかしげにてあて」だが、浮舟は「らうたげにこまかなるところぞいとをかしき」とある(浮舟六122)。中の君は気品があり、

浮舟はチャーミングだということのようだが、「こまか」とは具体的に  
はどういうことをいうものか理解できない。「こまやか」も、「源氏物語」  
の用例一〇〇例中、容姿の形容に用いられたのは四例のみである。玉  
鬘、中の君、匂宮、否定で空蟬の弟の小君に用いられている。

「源氏物語」では「こまか」「こまやか」は手紙の内容や調度品の細  
工などの形容に多く用いられ、容姿の形容に用いられることはまれで  
ある。また、紫式部以外では用例の少ない語でもある。「こまか」とは  
「細かい」の意で、細かい心遣い、細工が細かい、細々と手紙に書く  
というのには理解できる。しかし、容姿の形容の場合、「きめ細やかで美  
しい」などと現代語訳したところで、具体的にはどのように美しいの  
か理解しがたい。浮舟の髪は「いと多くて、六尺ばかりなる末などぞ  
うつくしかりける。筋なども、いとこまかにうつくしげなり」と描写  
される（手習六<sup>334</sup>）。「新編日本古典文学全集」は「隙間もなく」と解  
釈しているが、一本一本が太くてからまっておらず、縮れてもいない  
ことをいうものであるか。顔が「こまか」というのは、顔の細工が  
緻密だという意であろうが、ではどのような顔を細工が細かいとい  
うのか、もう一つはつきりしない。そうした「こまか」が多用されるこ  
とが、「紫式部日記」の女房たちの容姿の区別がつかなくなる一因であ  
ろう。

「白し」は「紫式部日記」に四例ある。平安時代も色白が好まれた  
ようだ。しかし、「源氏物語」では、肌の色の白さを表現する「白」は  
一六例のみである。意外なほど少なく、そのうえ赤子あるいは幼児が  
六例（内、薫が四例）である。「源氏物語」において、健康な成人で色

白だと言及されるのは、軒端の萩と浮舟だけである。残り八例は、や  
がて亡くなる紫の上の祖母、栄養失調の末摘花、病気の紫の上と柏木、  
紫の上の遺体、死ぬ直前の大君、妊娠して瘦せた中の君、浮舟の失踪  
による心労で瘦せた匂宮である。末摘花と紫の上は「さ青に」という  
語と同時に用いられている。肌の白さはほとんどの場合不健康のサイ  
ンであり、当時の美の重要な要素を特殊な場合に限定的に用いること  
ろに、「源氏物語」独自の用語法がある。その結果として、登場人物の  
イメージが鮮明になるのであろう。「白し」が美というよりも不健康の  
サインになっっていることは、「なまめかし」がサラダ感覚（ナマ）のさ  
っぱりとした優美さをいうのが本来の意味であるのに、「源氏物語」で  
は貴人の泣く姿や喪服姿、あるいは病気のさまなど、やつれて油が抜  
けたような美しさの形容にしばしば用いられていることに通じる。

「ものものし」は「紫式部日記」に三例ある。「源氏物語」では三一  
例中、人の姿・声・雰囲気用いられたものは二〇例である。その内、  
女性に用いられたものは四例のみである。小柄な空蟬と比較して「も  
のものし」く感じられた軒端の萩、「ものものし」くない落葉の宮、「も  
のものしくあざやぎ」たる女は嫌だと、夕霧の娘六の君をそのように  
予想して匂宮が思うこと、六の君の「ものものしく気高き顔」の四例  
である。六の君の「ものものし」は、権力者の父親を持つ誰にも負け  
ない強さを、中の君の立場に対して浮かび上がらせる描写といえよう。  
但し、匂宮は完璧な美人の六の君を気に入る。「紫式部日記」では、宮  
の内侍のスタイルに二例、中務の乳母の顔に一例用いられている。中  
務の乳母は「ものものし」とともに、「かどかどし」も二例あり、乳母

にふさわしい、落ち着いたしつかり者なのであろう。宮の内侍は「いともものしく、あざやかなる様体」とあり、「あざやか」は、公的で男性的な美質、官人としての有能さに用いられることもあるので、内侍としての有能な様子というものである。それは、匂宮が嫌だと思つた男勝りの女性である。

#### 六「源氏物語」に多く、「紫式部日記」に少ない形容語

「にほひ」「にほふ」「にほはし」「にほひやか」などは、「源氏物語」には多いが「紫式部日記」には少ない。「源氏物語」では、「にほひ」関係の語で容姿美の表現になっているものは六四例ある。源氏が九例、紫の上が七例、夕霧と中の君が各六例である。浮舟は一例のみで少ないが、「こまか」が三例と多い。一方、中の君は、「にほひ」は六例あるが、「こまか」は一例もなく、「こまやか」が一例あるのみである。形容語の使われ方に、中の君と、身分の低い母から生まれた異母妹浮舟の差が表れている。「にほひ」が一級の美の表現であることはこのことから窺えよう。一方、紫の上の父、紫の上の異母姉である鬚黒のものと北の方、朱雀院の子の今上帝、朱雀院の娘の女三の宮に対しては、「にほひやか」ではないとある。源氏から血縁または心理的に遠い皇族は、「にほひやか」とはされないようだ。この人たちには、高貴な人にあるがちな取り澄ました感じがあるということであろう。

「紫式部日記」では、「にほひ」が親友の宰相の君に、「にほひやか」がもう一人の宰相の君（北野の三位）に用いられているが、「源氏物語」の用例数からすると少ない。「源氏物語」でも女房クラスに用いられた

例が一例あるものの、高貴な存在に使用する語という意識が紫式部にあるといえよう。

「愛敬」も「源氏物語」に多く、「紫式部日記」には少ない語である。「紫式部日記」には宮の内侍と式部のおもと姉妹に各一例ある。「源氏物語」には五五例あり、その内、容姿描写に用いられたものは三九例である。源氏と紫の上各六例、中の君四例、近江の君と浮舟各三例である。「愛敬」は、阿弥陀仏などの慈愛に満ちた相を愛敬相ということから転じた、人を惹きつける明るい魅力をいう語である。現代語の「愛嬌」とは異なり、上品な美を表現する。しかし、軒端の萩や近江の君にも用いられており、「愛嬌」への変化の兆しはある。

宮の内侍は、先に述べたように「いとものものしく、あざやかなる様体」と描写されており、「愛敬」とは矛盾する印象を受ける。「源氏物語」では、「ものものし」かどかどしげ」と描写される夕霧の娘六の君には用いられず、中の君を六の君と対比して「ただ、やはらかに愛敬づきらうたき（宿木五420）とする。こうしたところにも、「紫式部日記」の容姿描写がわかりにくくなる理由があるのであろう。

#### 七 終わりに

痩せていることが美になったのはいつからなのであろうか。「源氏物語」の世界では、痩せている女性は不美人である。末摘花は、「痩せたまへること、いとほしげにさらほひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ」（末摘花一<sup>293</sup>）とあり、花散里についても、「もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ痩せに御

髪少ななる(少女三68)とある。ところが、「源氏物語」を少女漫画化した「あさきゆめみし」では、花散里はふっくらした顔に描かれている。<sup>(5)</sup>

「紫式部日記」では、痩せているとされる女性は一人もいない。それは、紫式部が容姿について記す前提として、「少しもかたはなるは、いひはべらじ」(76)と不美人については言及しないと断っているからであろう。

延々と述べてきたが、「紫式部日記」の女性たちの容姿が明らかに変わったとはいえない。「紫式部日記」は実在の人物を描き出すので様々な制約が生じ、「源氏物語」のように自由を描くことができなかつたということもあるであろう。実在する女性の描写のほうが画一的になるのは仕方がないこともある。一方、宮の内侍に見られた「ものものしくあざやか」と「愛敬」のように、一人の人間の中には矛盾する魅力が共存することもある。それをそのまま描写すると、本人を見たことがない読者には理解が困難になるであろう。今後、他の作品の用例を検討して、容姿を表現する形容語についての考察を深めていきたい。

本文の引用は、『紫式部日記 紫式部集』(新潮日本古典集成)、『源氏物語』(小学館「新編日本古典文学全集」)による。一部ひらがな表記を漢字表記に改めた箇所がある。漢数字により巻数を、算用数字により頁数を示した。

注

- (1) 増田繁夫「平安中期の女官・女房の制度」(『評伝紫式部——世俗執着と出家願望』和泉書院、二〇一四年)
- (2) 渡邊真希「『源氏物語』における女君の容姿考——女君の「運命」と体形の連関を中心に——」(『瞿麦』二〇一二年一月)
- (3) 宮島達夫編、笠間書院、一九七二年
- (4) 拙稿「『源氏物語』第二部の服飾——衣裳の色および「あざやか」の意味するもの」(河添房江編『王朝文学と服飾・容飾』竹林舎、二〇一〇年)
- (5) 大和和紀「あさきゆめみし」(『ミミ』講談社、一九八五年九月)